

背後から廻り込む

攻撃を準備せよ！

全ての闘う学友 あるいは「闘っている」と思い込んでいる学友に提起する。

我々は「バリケードの内」 清物石とオオムに変化した。これは一時的な事実である。

ある地帯に滞り、そこを穿つという過程が 一見次の進風へのステップを考慮している外に見えてその実、決定的な突破の階段でもある事は既に実行されても良い筈である。4.17の若干のGEWALTを際下げ 我々の斗争はもっぱら身体のごく一部(即ち口唇部)を使う程度で惨害的なカンパニオ以上のものではなかったらう(これは確かな事だ) 例えは我々の同志のじらは絶叫する

“秩序的決断力 情出する自己表現力”(418)

しかし、このじらは 我々にとってある契機かしてさ給もはずだ。政治的実力斗争に向けて、マル・ヤラナイという明快な二者択一を提起し、マルという方に賭けてきた我々が 所謂「ヤツタ」という過去形に入りこんだ瞬間 及びナニモマルコトカナイ!という空想に向いあつているという境目を我々は確然できるからだ。この空想は、我々の恥として常に覚えられねばならぬ。我々は、この空想に無自覚のまま聞き慣れた政治理論を流しても事でもできるし、学友に向けてカッコ好く「叛逆」を講ずることもできる。しかしそれこそ甘(弱意)の裏であり、我々が歩出した政治ゴロの純光へと落ちて行く「自然な」一歩なのである。

突入占拠以来 数日間、我々はオオムの林に同じ言葉で同志を(一般的に)提起し(つまり叛逆のススメ)清物石の外にバリケードの中に鎮座した。穿るとは何と退屈な仕事であらう。雑用ばかりで、考える暇も乏しい。運動を作り出す主体として参加したのに、

つの間に、運動に奉仕している。みんな甘懐しいカッコー(カッコー)になってクラクラなせへ出かけて行く、組織化 運動の展開……それが勝つために必要なのだ、という政治的説理が一つ一つ優先して行く。しかし我々は「それが斗争だ」なんて誰にも言わせてはならない。我々は、運動全体のイメージに参画こそすれその成果に属する事はありえないのだ。戦斗への投企も、勝負の決着も、その判断は各伯の実存の次元まで持ち上げられねばならぬ。何故ならば、真の斗争とはケレヒを捨てて非日常へ突進せよ、マル・ヤラナイの選択の水準を超えて、我々の日常性身体に拘る生々しい拒否のビジョンを目的に追求する過程をもつ筈であり、政治過程への短絡を断ち自立への道もそこにならうからだ。

<早稲田の運動のヘアモニーを切った>だのく運中のリズムに乗った>等言う御仁がいる。しかし、我々の状況は、リズムのツーステップに移れる程軽快は無いだろう。空間的に封鎖占拠を拡大して解決する同志など一つもないのだ。我々は、今こそあらゆる自己価値を排した覚悟と確信を行わねばならぬのだ。そして、マンネリの正面攻撃ではなく、敵の背後へ廻りこむ、非公算の回路を差異するのだ!